

■ ■ 第28回創造性研究会報告 ■ ■

研究会テーマ：

「CSVと日本における経済・倫理両立の系譜」

講 師：日本創造学会会員 兼田麗子
早稲田大学日本地域文化研究所客員准教授



2013年12月7日、近畿大学東京事務所セミナールームにて第28回創造性研究会が開催された。企業の社会的責任を示すCSR (Corporate Social Responsibility) は、やがてISOを中心により広義なSR (Social Responsibility) あるいはSRI (Social Responsibility Investment) へと論点を変遷した。その後、より社会との関わりが具体的なCSV (Creating Shared Value) いわゆる”共通価値の創造”がマイケル・ポーターにより提唱され、キリンホールディングスはいち早く”CSV本部”を組織化した。それ以前にキリンホールディングスは、飲酒運転撲滅という社会貢献と、事業を共有させた商品「キリンフリー」を開発し、業績を上昇させるという経験を有していた。

しかし、省みるにCSVは日本では古来から行われており、感謝・事業・報恩が一元的に実践されてきたのが日本の伝統的経営であった。今こそ、その商文化を再確認し、世界に示す時であると考えられる。豪商（長者）を中心に町作りし、商業都市にした大阪商人、浄土真宗の他利の心で良質・安価商品と全国的情報網を構築した近江商人、そして「人の氣」を観て顧客と一円融合した伊勢商人などにより日本の近世経済は発達した。現在の三越の祖三井高利は、故郷の伊勢から出発し、江戸、京、大阪でも奉公人を擁して商を手広く展開した。三井は、掛売りなしの現金商売、卸制度など合理的アイデアで増収を図るも、正直・真面目主義で健全経営を貫いた。富山の置き薬も世界に誇る情報ネットを構築しつつ「信用取引」という一線を守った健全経営で栄えた。ライオン歯磨きの創業者の小林富次郎は、歯磨き粉などヒット商品を生んだが、キリスト教に大きく裏打ちされた慈善心を経営哲学のベースに置き、慈善券付き歯磨き粉を売り出して、売り上げの一部を慈善事業に回した。

大原孫三郎は「得た利益で社会貢献をすべき」との使命感から、倉敷紡績の経営に手腕を発揮する一方で、労働者保護にも心を砕き、上下の差別なく共に働く一円融合経営を実践、飯場改善、寄宿舎改善のみならず、教育、習い事環境も整備した。三つの科学研究所である大原社会問題研究所、大原奨農会農業研究所、倉敷労働科学研究所は近代日本の労働行政に大きな影響を及ぼした。

聴講者からは、慈善に寄与するための収益構造について、あるいは、拝金社会の現在、誠実経営はいまこそ必要と考えるが啓蒙する手だてはあるかなどの質問が相次いだ。司会者補足として、大原孫三郎の手を離れた大原社研を一時支援した、日産の創業者でもある鮎川義介の天道経営を今に伝える鮎川義塾 (<http://www.ayukawagi.juku.com/>) が、日産グローバル傘下で活動を開始している旨報告した。 (報告：田村新吾任命理事)